

## 滅後

一 宗易が、濃茶の点前に一層やつした草があり、薄茶の点前には極真がある。この区別をよくよく得心するのだ。時に応じ、所によるものである。軽く思えるが秘事である、といった。

二 台子陰陽の曲尺をもつて、百万千万の飾りであっても、草葺くさぶきの侘わびび座敷であっても、この法に洩れるものは何もない。この仔細は長年の修行を積んでわかるものである。さてまた侘わびびの本意とは、清浄無垢の仏世界を表すもの。この露地草庵に来たつて、塵芥を払拭し、主客ともに直心にて交わりを持つことである。決まり、定め、長い短い、式法などとうるさくいうものではない。火を熾し、湯を沸かし、茶を喫するまでのこと。他愛もないものである。これがすなわち仏心の顯れるところ。作法、挨拶にかかずらうゆえ、諸々世俗の法に墮して、あるいは客は主の過ちを伺いそと誇り、また主は客の過ちを嘲あざわらる手合いと成り果てる。

この仔細、熟得じゅとく了悟りょうごしたくとも、時は人を待つてはくれぬ。趙州一を亭主とし、祖大師二を客とし、利休居士とこの坊が、露地の塵を拾いでもすれば、そのような一会も調うべきか。大笑、大笑。

このようにはいつても、天下の人を達磨にも趙州にも成し難い。成したいと思う心が、すでに執着となる。よしよし、三界出離の人は、かえつて三界に安座するというではないか。ここに至つて当惑、朦朧となる。利休居士の得心はいかが、と問うて見れば利休は、

「かの達磨大師の大悟においては愚盲の宗易、どうして御坊に及ぼうか。ただし、御坊は仏教経論により、かえって迷いを生ずると見える。宗易、茶によって申すべし。

台子を初め、諸事の規則、法度は百万千万ある。古人もここに留まって、これを茶の湯と心得たものと見える。各々の法式を大切にすることのみ、秘書に記し置いたのだ。この宗易は、それら法式をはしごに使い、今少し高いところに登ろうとの志を持って、大徳寺、南宗寺などの和尚にひたむきに聞きただし、朝夕禅林の清規<sup>三</sup>を本とした。かの書院結構の式より曲尺をやつし、露地の一隅に浄土世界を打ち開き、一字の草庵、二畳敷に侘び住まいして、薪水のために修行し、一碗の茶に真味のあることをようやくほのかに覚え始めたが、時として水に濁りをなすことは、宗易のいまだ至らぬところである。

また客人が得道せぬゆえ、主もまた引かれて迷うことがある。されば、例の三和尚<sup>四</sup>、御坊などにお越しいただければ、宗易の誤りもおおかたなくなるものを。ただ恐れるのは、世に数寄者多くなるほど、師匠も多く、口々に指南しては、たとえば大名高家の交わりに、草庵を書院のように取り捌き、その本意を尋ねることもない。また大食大酒の人は、草庵においても酒盛りの興をなし、その心に叶わざれば、侘び数寄を嫌うもの。

世渡りの師匠ども、大名の気に入り、茶会の趣向を凝らすことを専らに念じ、金持ち、分限者がこれを好むを幸いに、欲心より進める茶の湯と成り果て、ただの今でさえ思いの他のふるまいが多いものとなった。ましてや、末代の茶の湯、思いやられてせひもなし。百年後<sup>五</sup>、いま一度生まれでて、世間の茶の成り果てたありさまを見たいものがある<sup>一</sup>。

といった。愚僧が、さればまたどのように指南すれば、道が正しく立ち行くのでしょうか、と問えば、宗易は、

「いくら思案しても、埒の明かぬことがある。せめては、書院台子の作法を習いたいという人があれば、知らぬといつて教えぬ。そして草庵のことばかり、楽々と伝授し、曲尺も教えぬ。大方量の目数をもって覚えさせ、炭次の次第、濃茶、薄茶ただ一通りに習わせて置き、侘びの心を存分に思い入れて修行するようにのみ仕立てれば、その内十人二十人に一人くらい、道に敏い人は道に入るであろうか。道に入るほどの人でさえあれば、その時の望み次第に、台子をも得心させ、立ち返って品々の規則をも修行させれば、一日二日で済んでしまうもの。

されどこの思案も成し難い仔細がある。能阿弥、相阿弥伝授の末弟子、珠光、紹鷗の弟子ども、出来不出来いくらもいて、この頃所々に蜂起して、様々筋目もわからぬ飾り、置き合わせをしては人に珍しがられ、それを売りにしているのだ。誰それはこの飾りを客に見せた。その客はなにがしの弟子であったが、それを知らずに赤面した。なにがしの弟子はよく知っており難なくこなした、などと言おうものなら、師を取替え、出入りを止める手合いが多い。それゆえ師匠も思い思い、様々の飾りを作り出し、古伝に背くこと、数えることもできぬ。十年といわず、茶の本道廢るべし。廢る時、かえって世間には茶の湯が繁盛するものと思われよ。ことごとく俗世の遊び事となつて浅ましい成れの果て、今にも見えるようである。

かなしいかな。宗易、中国日本ともに古来なかつた露地草庵一風の茶の湯を工夫し、おそらく趙州の意にも叶うべし、と思われるに、末世には受け入れられず、ほどなく正道断絶すべきこと口惜しいことである。二畳敷もいずれ二十畳敷の大茶室に成ることかな。宗易、三畳敷を設えた時でさえ、道の妨げと後悔したものを。とにかく、このように思うことも茶道の執着。仏祖、聖賢の大道さえ、時を得て、栄え、また衰える。いささかも悲しむべきではない。また末世出現の仏、なきにしもあらず。この道においても、得心の人が後世出来し、御坊や利休の志に感通すること

もあるはず。そうした人に一服の茶を手向けられたなら、百年後であったとしても、骸骨も涙を流し、亡魂も志を受けてなぜ喜ばぬことがあるか。必ずやわれら茶道の守護神となり、仏祖もお力添えくださるであろう」

とねんごろに答えたのである。

さて、その日は天正十七年二月二十八日。夜、小雨がしめやかに降り、話は夜半過ぎに及んだ。まさしく、この夜から二年後、天正十九年同月同日に、師利休は不慮の災難に遭われた。悲嘆かぎりなし。今はもうこの坊より他に、日々回向の茶の湯を手向ける者としてあるまい。この坊なきあとも、怠りなく回向申すようにと看板<sup>六</sup>を残し置くのである。

三 利休は、大釣舟、小釣舟の花入を所持していた。いずれも、床の天井真中に、小ヒル釘を打って吊つたもの。宗無も小釣舟を所持。利休と同様に吊つた。立石紹林は名物の小舟を持つ。これを床の落懸の内側に釘を打って吊つた。利休に尋ねたところ、

「吊り方に古来定法はない。めいめい分別工夫すればよいが、落懸<sup>おとしがけ</sup>七に吊つては、小座敷では花が近づきすぎて落ち着かぬ。その上、落ちては床の縁に当たり、客にも危なげな心が生まれる。されば、大小ともに真中に吊っている」と答えた。卓見、感服させられた。

四 書院の釣香炉なども真中に吊る。赤松<sup>八</sup>所持の名物、青嶂<sup>せいしよう</sup>という猿の香炉は、棚板の上に落ちては危ないので、下に敷物を敷いて吊つた。が、後にはいつそう秘蔵。その香炉のために、違棚を取り外し、上の袋棚のみとし、その

棚の下に吊り下げ、下には畳を敷いたという。道陳の物語である。

五 この坊が賜ったあさなべの花入は、無論床の真中に、鎖を長くたらしめて吊ったものだ。位置が高すぎると、舟とは違い見栄えがよくない。ことに夏は、水を湛え水面が見えるほどに、一段と低く吊ることに興趣があるという。この花入は、周防の大内殿が所持していたものだが、当時より紹鷗、利休も注目していた。月の絵のところは、昔よりこのように繕っていたものようだ。月の絵柄を前に、また無地の方を前にも、時に応じて用いられた。

六 利休居士をわが集雲庵へお茶にお招きした時は、五月雨の頃、風炉釜であった。

茶を茶碗に入れ、いったん水指の蓋を取ったが、気温も肌寒ければ、釜へ水を差すこと理屈に合わぬと、前より思っていたゆえ、水を差さずに茶を点てた。茶の湯が済むと、利休は散々に叱り、

「なぜ水を差さぬか。忘れておらぬ証拠に水指の蓋を取ったではないか。ますます不心得なこと。水を差す仔細、さいわいここに宗及、宗無、巧者お二人が同席されているゆえ習うべし」

といった。すなわち兩人に尋ねてみると、暑さはなほだしい折とは違い、今日の天気では差さぬことにも一理ある、などと答える。兩人が帰った後、利休の袖をとらえて、今一度お尋ねした。利休は、

「兩人とも世に知られた茶人ではあるが、奥儀において鍛錬が足りぬように見える。そもそも、茶の湯という名は何をもつてつけられたものか。茶と湯の相応じることが第一義である。

草庵にて、初座の火相を見、後座の湯相を推し量って席入りし、ほどよい茶にめぐり合うを、巧者の客という。ま

たその客に応じて、湯相、火相を加減して茶を点てるものを巧者の亭主と申すのだ。

口切より正月二月までは、茶の気が強く保たれているが、およそ三月も半ばから末になると、少しずつ気も衰える。四月ともなればよいよ気薄く、五月雨の頃などは、もつてのほかに衰えるもの。それゆえ、湯の煮える音、五音の段階の内、口切には最も強い峠の松風の湯相、正月二月にいたっては、雷鳴の熱を通り越して、と徐々に湯相の心もちを加えるのだ。四月以降、茶の色香ともに衰えているにも関わらず、沸き立つ峠の湯を打ち込めば、茶の気たちまち抜け、色香も変わってしまう。それゆえ風炉の湯相は、熱湯に水を柄杓一杯打ち入れ、汲み取ってゆるんだ湯音を茶碗に入れば、湯相やわからかに茶の気をたすけ、お互い相応するのである。炉で夏の会をする場合も同様である。これは台子の秘伝のしきたりである、と紹鷗がいった。

炉で点てる冬の茶の湯は、夜明けに入れ替えかけた湯に、水を次ぎ足し、次ぎ足し、いかにも湯が練れてくるのがよい。また夏の茶は、気が衰えているゆえ、練れ過ぎた湯は気が埋もれてしまいよくない。それゆえ、客の前で水より沸かし、その沸き立った湯に水を差す心得であれば、湯味軽やかで、茶の気も発するもの。これほどまでに意味の浅からぬものを、ただ暑気を散ずるため水を差すなどとは、大いなる不心得である。

ある時、利休が施薬院<sup>九</sup>を茶にお招きしたところ火相、湯相ということをお尋ねなされたので、このあらましをお話したが、それはこもつとも。医薬の道にも、文火、武火を薬によって使い分け、寒飲熱用、熱飲寒用などという処方も、みな湯と薬の相応を考へてのことである。利休の茶がさほどまでに鍛錬したものであれば、茶がおいしいだけでなく、服用すればまこと仙薬ともなろう、と感想を述べられたものだ。さてこそ、あつさりとした名ではあるが、茶の湯という名には、深遠の道理が込められていることをわきまえるがよい」

と話した。それより、ますますこの心に専念して見てきたが、炭の次第より始まって、一座いちざい一会いちえの心は、ただこの火相、湯相のみにあることだ。

七 茶の師範たる者、よくよく心を働かせるべきである。

天王寺屋宗及一〇は、一風思ひ切った作意を見せる人で、一冬に二、三会、一夏に一、二会、必ず人も聞き伝えるほどの逸話をつくったものだ。

ある暁、雪が面白く降り積もったので、宗及ふと思いついて利休を訪ねてみた。案のごとく、露地の戸が細めに開けてある。腰掛に入り案内を問うて休んでいると、名香が遠くより薫じ、灯がかすかに感じられる。さてこそは蘭奢待らんじやたい、と聞き知ったという。宗及は香道の名人である。さもあるべし。

宗易は紙子に十徳の出で立ちで迎えつけに出る。座入りの後、名香の炷空をと所望し、香炉がそのままに出された。主客さしむかい、何かれと挨拶する内に、水屋の潜り戸の開く音がする。宗易、いうには、醒ヶ井に水を汲みにやったが、遅くなり今ようやく着いたものと見える。さっそく水を取り替えるべし、と釜を引き上げ勝手に持ち入る。

その後、宗及はそのまま台目に行つて炉を見たが、すなわち寅の火相。いうにいわれぬ見事な火相である。棚の炭斗に炭が組み上げてあったのを、宗及取り下ろして炭を置き添え、羽箒にて台目を清め亭主を待った。利休が茶堂口より釜を持ち出してきたので、宗及は、

「火相もちろん結構でした。ですが、水を替えるに際し、ひときわ火相を強められるに違いないと推量し、お手間をとらせるまでもなし、それがし炭を次いでおきました」

と声をかけた。利休はことのほか感じ入り、このようなお客にお逢いできてこそ、湯を沸かし茶を点てる甲斐もある、と宗及の客ぶりを後々までも語ったと伝える。季節は夜長、その後夜明けまでやや時間があつたので、この火相にてお茶を進せたき由、挨拶あつて、いまだ暗い内より懐石を出し、食事の間に夜が明けた。

これらは常の会にてなすべき主客の働きではない。この会の折、愚僧はやや遅れてまいり、宗及座入りの由伺つたゆえ、勝手へ回り、よくよく主客の働きを見たものである。このように宗及、すぐれた茶人であつたが、狭い座敷を好まなかつた。四畳半、六畳敷などを好んだので、弟子の中には心得違いもあり、飾り、諸道具多く、色々なことが起こつてしまった。

八 住吉屋宗無は、古風正統の茶人にして、たとえばこの茶入にはその茶碗、あの水指と、日頃じっくり吟味して定めおき、およそ置き合わせなどもどこであつても常に一様にした。未熟の輩には見所少なく、面白みのないように入々が感じたものだが、その日、その夜の節に応じ、思い入れの深い点前を見せた。もっぱら夜会を好み、年々習熟してきたので、夜会ではひとしお見事に勤めたものだ。禅宗に造詣が深かつたゆえ、趣のある茶が多かつた。

人によつては、茶の湯が湿りすぎる、といわれた。利休はことさら褒めて、いま少し働かせたくはあるが、働かすぎての誤りよりは、遥かにましである、といずれの意味でも評価していた。

九 納屋宗久二、点前などする姿はなんとも見事なものであつた。それゆえかつて御意をも得、上様御茶道として宗易に劣らず、御賞玩いただいた。されど思い入れというもののない人であつた。後には、殿下に軽々しく扱われ

たとのこと。

一〇 勢田掃部三は、はなはだ奇異の人で、思いきった働きにより、たびたび人々目を驚かす。とはいうものの、あまりに飛びすぎて、殊勝なしめやかさに欠けた。

一一 宗易居士は理に通じ、わざいに叶う大悟の茶人である。されば四季折々、昼夜ともに自由自在の茶であった。その根本を明らかにし、その末をわきまえ、ひたすら茶の正道を世に伝えることを元に、深く志したのである。されば、わが誤りも隠す心がなく、人にもわざわざ語って聞かせる。自分に勝るよいものがあれば、どのような初心の人の所作をも感嘆し、自他の分け隔てなく、道においてただ深く思い入れのみもっていたので、交わる人すべて親しくならぬ人はなかった。

書入

そうじて暁の火相を、寅の火相という。すなわち、これを朝会まで用いるのだ。まず寅の刻、宵より釜の底につかえるほどになった炉中の底を取り除け掃除をし、井華水<sup>せいかすい</sup>を汲んで釜を洗い、一炭した後、水釜にしてかける。およそもう一炭置いて、朝会客入りの下火によい頃合いとなる。夜話しの会への客来は、刻限に応じて働く。

ある人より利休へ、暁に何うとの案内があった。されど遠方の人で、思いのほか遅くなり、夜が明けて座入りした。この時、自分は勝手におり、働きを見ていたが、少しずつ炭を次ぎ足して客を待っている。それゆえ炭が釜の底に支

えていたので、客入りの後、炭点前で炉の底を軽く取って、掃除をし、炭を置いたものだ。つくづくといたずらには心得難く、自得の上でなければ、暁の火相は成り難いものと思われる。

午うまの火相とは昼の会の火相である。朝より続いた炉中を午の刻の頃、改め一炭する。これがすなわち客入りの下火となる。酉とちの火相とは夜会の火相のことである。暁の火相に似た心がある。夕暮れよりまいる客がある。暁の時の働きを心得るべし。酉の頃に火相改め、炉中掃除した後、酉の下刻に席入りすることは常の夜会であり何も問題は無い。掃除の前より来て、ゆるゆる話をし、下火より所作を見るべく所望の客がある。巧者の亭主には必ず、このような客が来る。暁の時と同じこと。

暁も夕暮れも座興なしでは間がためゆえ、香炉など出すことは常の習いといえよう。

四畳半に短冊、硯など置いて詩歌をたしなむなど、客に応じての座興である。亭主の間の延ばし方、縮め方が肝要である。すべてこの寅、午、酉の三度の火相、必ずや茶会の第一義となるゆえ、これを三炭という。また右と三度の会にて、露地に水を打つことがまた秘事となるゆえ、あわせて三炭三露と呼ぶ。

笑嶺和尚が、

「三淡ともいいたいものだ。交わりの淡さ<sup>一四</sup>、茶の淡さ、水の淡さにも相通じる。露の文字も、心の露、雨露の露、露地の露と、各々よりどころがあるではないか」

と興じられたものである。

- 一 趙州 唐代の禪僧。
- 二 祖大師 禪宗開祖、達磨大師。
- 三 清規 禪宗寺院の規則。
- 四 例の三和尚 大林和尚、笑嶺和尚等。
- 五 百年後 利休がこれを語っているのが天正十七年（一五八九）であり、この二年後天正十九年（一五九二）に切腹する。従って滅後の巻が立花実山によつて発見された元禄三年（一六九〇）がちようど百年忌に当たり、この言葉に符号する。
- 六 看板 集雲庵、松下堂の柴門に掲げられた「露地清茶規約」の額を指す。「滅後」六一。
- 七 落懸 おとしがけ 床間の手前上の天井より一段と下げて横にわたした横木。
- 八 赤松 赤松前司貞村。「墨引」三四。
- 九 施薬院 医師。秀吉に仕える。
- 一〇 天王寺屋宗及 津田宗及。
- 一一 納屋宗久 今井宗久。
- 一二 勢田掃部 瀬田掃部。利休七哲の一。
- 一三 井華水 せいかずい わか水。
- 一四 交わりの淡さ 莊子の「君子の交わり淡きこと水のいとし」より。